

はじめに

本書は、教師の「指示」に焦点を当てた本です。

本書では、指示に関して二つのことを述べていきたいと思います。

一つは、指示の基本についてです。教師にとって、しっかりととした指示を出せるることは非常に重要です。指示が上手な教師の教室はなかなか荒れません。教師として子ども達を指導していく上で欠かせない資質の一つです。むしろ、これが欠けていると教師自身も学級運営に苦労することになります。ですから、これまでの先人が論じてきたことも踏まえつつ、私の実践を踏まえて指示の基本を紹介したいと思います（1章）。

もう一つは、指示で子どもを伸ばすことについてです。しっかりととした指示を出すことは、今までもいくつかの教育書で論じられてきました。しかし、管見の限り、それらは「このように指示をすればうまく子どもを動かせる」というようなものであつたと思います。本書では、「子どもを動かす」ということ自体は否定しませんし、それなしに学校教育を進めていくのは無理だという立場をとります。ですが、しっかりととした指示を出して子どもを動かすということだけでは不十分だと私は考えています。指示を通して子どもを育て、伸ばしていくという方法についても論じていきたいと思います（2章以降）。

「指示」と聞いて、どのようなことを思い浮かべるでしょうか。

「教師が子どもを動かす」「教師が子どもに一方的に与えるもの」、はたまた「指示待ち人間」などなど、あまり良くないイメージを思い浮かべる方が多いのではないかでしょうか。

私も教師になろうと勉強していた学生時代や、教師になりたての初任者時代は、漠然とそのように考えていました。

確かに、指示は教師が子どもに対して出し、子どもを動かすものですし、指示なしでは動けない受動的な人間を育ててしまってはいけません。

しかし、よくよくこれまでの教師としての生活を振り返ってみると、教師として指示を出さなかつた日はありませんでした。

思えば、初めて教壇に立った日、最も困ったのは「指示の出し方」についてでした。

初日から、学級担任として子どもを動かさなくてはいけないにもかかわらず、どのように話したらいいかわからなかつたのです。

子ども達に伝えたいことがなかなか伝わらなくて非常に困りました。

初任者時代、こちらの指示が良くないと、明らかに子ども達が落ち着かず、「これではクラスが荒れてしまうな」という思いを持ちました。指示の重要性を痛感しました。

そもそも、全く指示をしないという教師はないはずです。年度初めから教師からの指示がゼロで、すべての学校生活が成り立つようなクラスなど存在しないでしょう。

むしろ、しっかりとした指示を出せるということは、「主体的な」学習者を育てることが求められる昨今においても、欠かせない教師の資質です。

ですが、先述のように指示に対しては良くないイメージを持ちがちなので、何となく敬遠されるのではないかでしょうか。

特に若手教師にとって、きつと指示を出していけることは、教師として成長していく上で非常に重要です。本書がその助けになればうれしいです。

そして、指示の基本を押さえた上で、本書で主張していきたいのは「**指示を通して子どもを自立させること**」ことです。指示は授業中に限らず、学校教育において最も多く教師が発する言葉とも言えます。そのような重要な言葉が「何となく」発せられていたり、「子どもを動かすため」だけに発せられていたりしたら、それは非常にもつたないことですし、危険なこともあります。

指示がうまく機能していたとしても、つまり子どもが動いていたとしても、教師がそれで満足してしまっていたら、場合によつては指示がないと動けない子ども達、指示待ち人間に育ててしまつかもしれません。

ですから、教師はしっかりと指示を出せるようになり、子どもを動かせるようになったとしてもそれで満足せず、子どもが自分で考えて動けるように、自立させていくことも考えていかなくてはいけないのであります。

そのためには、簡単に言えば「**指示を減らしたりなくしたりする**」ことが必要なのです。

指示について扱った本なのに、その指示をなくしていくとはどういうことだろう、と思われるかもしれません。指示の本質は「**指示がなくても子どもが自分から動けるようにすること**」「**自分で考える力をつけていくこと**」にあると私は思っています。ですから、最終的には「**指示をなくす**」ということを目指して指導していくことが重要です。

ただし、「**指示をなくす**」ことはなかなか簡単なことではありません。効果的な指示は子どもをしっかりと動かせるため、その状況に教師は満足しがちです。その指示から離れられなくなるのです。例えば「おへそをこちらに向けなさい。」という向山洋一先生の有名な指示があります。これ自体は非常に効果的な優れた指示です。しかし、いくら効果的だからと言っても、これを一年中ずっと使い続けるのはいかがでしょうか。わざわざ、このように指示しないと話を聞けない子を育ててしまつていると言えます。

つまり、指示をする側の教師には、しっかりとわかりやすい指示をする技術と、指示をしながらもその指示をなくしていくために子どもを育てる技術が必要とされているということです。本書では、指示を減らしたりなくしたりして、子どもを自立させていく方法について、詳しく述べていきます。

指示は単純に見えて非常に奥が深いです。本書が、その指示について先生方が見つめ直すきっかけになれば幸いです。

第1章 子どもに「伝わる」指示の基本

- 1 指示は教師の生命線だ！ 14
2 まず基本を押さえる！ ただし、それだけで満足してはいけない！ 18

3 指示の基本① 一つの指示で一つの行動（一時一事） 24

4 指示の基本② 端的に、具体的に出す 28

5 指示の基本③ 行動の終わりまで示す 32

6 指示の基本④ 指示が伝わっているか確認する 36

7 指示の基本⑤ 指示の前に準備をする！ 40

8 指示の基本⑥ 指示を伝えた後は質問を受ける！ 44

- 9 指示の基本⑦ 子どもの行動を評価する 48

第2章 子どもを「動かす」指示――聞く力を育てる

- 1 指示には「動かす指示」と「考え方から動く指示」がある 54
2 「動かす指示」で育てる力とは？ 58
3 「動かす指示」のレベルを上げる 62
4 即時的な行動「動かす指示」のレベルアップの方法 66
5 即時的な行動「動かす指示」レベル① 基本通りの指示 70
6 即時的な行動「動かす指示」レベル② 評価や確認を抜く 72
7 即時的な行動「動かす指示」レベル③ 一時一事を抜き、予告・確認を入れる 76
8 即時的な行動「動かす指示」レベル④ 一時一事を抜き、予告のみ入れる 74

第3章

子どもが「動く」指示――考える力、行動する力を育てる

- | | | |
|-------------------------------------|-----|----|
| 1 「考え方自ら動く指示」の概要とねらい | 94 | 9 |
| 2 「考え方自ら動く指示」で育てる力とは? | 98 | 10 |
| 3 子どもが考え方自ら動くための素地を育てる① 積極性を伸ばす | 102 | 11 |
| 4 子どもが考え方自ら動くための素地を育てる② 理由を考えさせる | 104 | 12 |
| 5 子どもが考え方自ら動くための素地を育てる③ 自己決定の機会を設ける | 106 | 13 |
| 6 「考え方自ら動く指示」のレベルアップの方法 | 108 | 14 |
| 7 「考え方自ら動く指示」レベル① 限定的に問い合わせ、気づきを促す | 110 | 15 |
| 8 「考え方自ら動く指示」レベル② 抽象的に問い合わせ、気づきを促す | 112 | 16 |
| 9 「考え方自ら動く指示」レベル③ 自分で考えて行動する時間をとる | 114 | 17 |

即時的な行動 「動かす指示」 レベル⑤ 一時一事を抜き、予告・確認なし 78

定期的な行動 「動かす指示」 のレベルアップの方法 80

定期的な行動 「動かす指示」 レベル① 丁寧に示す 82

定期的な行動 「動かす指示」 レベル② 概要を示す 84

定期的な行動 「動かす指示」 レベル③ 子どもに思い出させる 86

定期的な行動 「動かす指示」 レベル④ 何も指示しない 88

定期的な行動 「動かす指示」 レベル⑤ 指示以上の行動を待つ 90

第4章

さらに子どもを自立に導く指示

- 1 自分の指示を疑う意識を持つこと
指示に自己決定をからめる 122
- 2 問いかけを入れ、「一方的」ではない指示にする 122
- 3 あえて逆を言い、挑発する 128
- 4 あえて情報を不足させる 132
- 5 子どもを大人扱いする 134
- 6 授業中の指示をなくしていく 136
- 7 教室移動 118

第5章

具体的な場面でわかる！ 指示の出し方

- 1 様々な場面での指示の出し方
登校時 142
- 2 起立（朝の会でのあいさつ）
当番活動 148
- 3 朝の会（一日の流れを伝える）
ペアでの話し合い 144
- 4 ノートの指示 150
- 5 練習問題を解く 146
- 6 授業終了時 152
- 7 教室移動 154

◆参考文献	16	15	14	13	12	11
学年だよりの配付時	168	166	164	162	160	158
全校朝会後	170	168	166	164	162	160
出張時	174	172	170	168	166	164
帰りの会で連絡	170	168	166	164	162	160
席替え	170	168	166	164	162	160

指示は教師の生命線だ！

□ 指示とは何か

学校は、子ども達の行動や活動の連続で成り立っています。

登校をして、あいさつをして、ランドセルをしまい、朝の会をして、授業の準備をして、ノートに自分の考えを書いて……。

このように子どもは学校でたくさんの行動や活動をしており、その行動や活動 자체が学校生活であり、教育活動でもあります。

子どもの行動や活動で学校教育は成り立っていると言つても過言ではありません。

指示は、教師が子どもにしてほしい行動や活動を伝えるための指導言です。

指導言とは教師が指導の際に使用する言葉で、発問・指示・説明の三つがあるとされています。

例えば、授業中の教師の指導言を思い浮かべてみましょう。

「このときのごんはどんな気持ちですか。」（発問）
 「ごんの気持ちをノートに書きましょう。」（指示）
 「ノートに書いたことを発表してください。」（指示）
 「ごんは、兵十に親しみの気持ちを持つていたのですね。」（説明）

ものすごく簡略化しましたが、授業はこのような具合で進んでいきます。

これを見ておわかりのように、**指示は、子どもに一番ダイレクトに作用する指導言です。**

発問で課題意識を醸成したところで、指示がなければ子どもは何をどうしたらいいかわかりません。ノートに書かせたことを実際に発表するという行動や活動をさせなければ、子ども達の考えを共有することはできず、それを受けての教師の説明もすることができます。

教師の指導言の中では、どうしても「発問」が注目されがちです。

私自身、発問について熟考することこそ、子ども達の授業への意欲を喚起し、思考を促すと考えていました。

しかし、実際にはいくら発問が良くとも、子ども達にどのように行動や活動をしたらよいか伝えられなければ、良い授業にはなり得ません。子どもが何をしたらいいかわからないからです。

つまり、指示がなければ、子どもの行動を促すことはできず、授業は進んでいかないのです。

指示の基本①

一つの指示で一つの行動（一時一事）

それでは、ここからは指示の基本を押さえていきましょう。

まず何よりも欠かせないのは、一つの指示で一つの行動にする、ということです。

これは、向山洋一先生により「一時一事の原則」という言葉で提唱されていることと同義です。一つの指示の中に、子どもがすべき行動を一つにすることが基本中の基本です。

例えば、次の指示は一つの指示で三つの行動が示されています。

「算数の教科書を出して、○ページを開いて、×番を見ましょう。」

「そうではなく、

「算数の教科書を出します。」

「○ページを開きます。」

「×番を見ます。」

と分けて、一つの指示で一つの行動にしていきます。

そうすることで、子ども達は「自分が今すべき行動」を明確に理解できます。

☑ なぜ「一つの指示で一つの行動」が重要なのか

子どもは、いっぺんにたくさんのことと言われると忘れてしまい、その通りに動けなくなります。

大人でも、一気にたくさんのことと言われるとわからなくなるものです。

想像してみてください。

例えば、職員研修などで、

「PCの電源をつけて、IDとパスワードを入れてログインして、Wordの新規作成ファイルを開いて、余白をやや狭いにしてお待ちください。」

と指示されたとして、職員全員が、周りの誰にも「次、何するんだっけ?」などと助けを借りずに指示された通りできるでしょうか。

恐らく無理ですよね。

このような場合、大人であれば小さい声で周りに聞くなどして、適切に対処できます。

しかし、子ども達の場合、とりわけ子ども同士の関係性も構築されていない頃では、まず間違いなたりする子も出てくるでしょう。

子どもによつては「わかんないよ!」とパニックを起こしたり、全く指示についてこようとなかつ



一つの指示で複数の行動



子どもが混乱していて、
教師もよくわからなくなってしまう…



一つの指示で一つの行動



子どもがテキパキ行動でき、
教師はそれをほめることができる

ポイント

句点を多くする意識を持つとうまくいく！

そして、そこから逆算して、行動を区切っていきます。明確でないのに見切り発車で話し始めると思いつきで指示を足していくてしまい、結果的に長い指示になりがちです。

そのためには、話す時に「句点(。)」を多くするイメージを持つとうまくいきます。
「読点(。)」ではダメです。△△して、○○して、××して……」といった具合に長い指示になります。
がちだからです。

また、あらかじめどのような行動をしてほしいのか明確にしておきます。

☑ 一つの指示で一つの行動にするポイント

それでは具体的にどのようにことを意識していけばよいのでしょうか。

それは、細かすぎるかな、と思うくらい細かく区切ることです。

そこで、指示を区切るイメージを持つとうまくいきます。

そういうしてクラスが騒がしくなつて焦った教師は「うるさい！」と怒鳴り、雰囲気を悪くします。
指示が悪い→子どもが騒がしくなる→叱責……という悪循環に陥ります。
反対に、指示を細かくすれば、子どももわかりやすく、指示通り動けます。それを見て教師はほめることで、子どもはさらにやる気を出し、教室全体も良い雰囲気になります。

一つの指示で一つの行動を示す→子どもが動ける→それを見て教師がほめる……という良いサイクルができます。

特に初任者や若手教師はこの良いサイクルをベースにクラスをつくるべきです。誰にでもできる汎用性のある方法だと思うからです。